

中国はどこへ——9年ぶりの南京で考えた

9年ぶりの南京、そして中国

2014年に金陵中学を訪問してから、9年ぶりの南京訪問になりました。その時は、5日間で1泊は上海でしたので、授業交流以外の南京そして中国の状況がよくわかる行程でした。今回は4日間なので、まさに「歴史教育交流」がメインで、中国の現状把握は十分にはできませんでしたが、それでも帰国後、高校の授業で紹介することができました（茨城県の私立高校で、非常勤講師として「公共」を担当）。

生徒たちの感想です。「中国の悪い所ばかり見ていたけれど、こうやって中国を見てみると、良い所も多くあって、自分でも中国について調べてみようと思った」「中国と日本の関係は良くないけど、お互いにダメなところ、良いところがあるから、お互いのことを尊重しあうことが、関係の改善につながると思う」「大都市に旅行に行ってみたいと思った。中国って案外きれいだった」「もっと中国について知りたいと思ったし、ビルや自動車の環境などももっと知りたいと思った」と書いてくれました。パワーポイントで写真を見せながら話をしたのですが、中国に悪いイメージを持っている生徒が多かったので、良い所を紹介して関心を高めることができて良かったです。

驚異的な速さで変わる南京

それにしても、南京の急激な発展ぶりには驚きました。私は鉄道愛好家なので、南京の地下鉄を例に挙げると、2014年には5路線が運行中でした。2023年には13路線に増え、現在事業進行中が11路線もあります。近々1000万を超える巨大都市のインフラ整備が驚異的なスピードで進行しています。郊外に次々と高層住宅が建設され、高層ビルがそこかしこに林立する様子を目の当たりにしました。環境に優しいとヨーロッパで普及しているLRT（次世代型路面電車）まで走っていました。

中心市街地のインフラ整備も進み、電柱の地中化はもちろん、道路が拡張されて、車、バイク、自転車、歩道と3つに区分されています。バイクは9年前もそうでしたがすべて電動であり、さらにファッションブルに進化していました。電動アシストのシェア自転車もそこかしこに設置されています。電気自動車も目立ちましたが、路線バスはほぼ電動になっていました。ベンツやBMWのような高級車も目立ち、欧米の有名ブランドショップもたくさん進出しています。

経済格差の大きさを感じます。庶民の足は自家用車ではなく、まだまだバイクです。子どもたちは親のバイクに乗って登校していました。高層ビルの裏側を歩けば、昔ながらの生活が息づいています。中国はどこまで経済発展できるのでしょうか。経済と政治のひずみはどこへ向かうのでしょうか。

郊外に開校した「スーパー・ハイスクール」の授業

授業交流した南京第I中学も金陵中学も旧市街地の本校ではなく、郊外に建設中の高層住宅を中心とする開発地区に開校した新

校を訪問しました。両校とも日本から見れば大学並みの施設設備を備えた「スーパー・ハイスクール」です。南京第1中学は公立ですが、特別待遇でエリート教育を行う高校として運営されているようです。学校には(先生にも生徒にも)成果が求められています。7時から22時まで勉強漬けの毎日とか。金陵中学は私立ですから、授業料は相当高いでしょう。どちらも富裕層の子どもたちしか学べないのではないのでしょうか。

授業の内容については触れませんが、2つの中学とも授業者は若い女性でした。テキパキと進行する授業とそれを受容できる生徒たちを見ていると、私が教えている高校生とはまるで違いましたが、自分で考えることはできるかなと些か疑問も湧きました。高校生と交流する時間がなかったのは残念でした。中国の教師には部活動指導はないようですが、保護者や生徒への24時間の対応が求められ、評価による昇進制になっているため、相当なプレッシャーがあるようです。まだ教師に権威があるので、バランスが取れているのかも知れません。

「平和を展示するのは難しい」けれど

——3つの記念館で

9年前と同じように、「侵華日軍南京大虐殺遇難同胞記念館」を訪問しました。今回は館内を職員の芦鵬さんに案内していただき、より深く記念館を理解することができました。屋外の記念碑や平和の塔の脇に立ち、「平和を展示するのは難しい」との芦鵬さんの言葉を噛みしめました。記念館では紫金草をモチーフにした記念品を販売していましたが、紫金草は南京と日本人との平和交流のシンボルです。紫金草の種を南京から持ち帰り「平和と愛の花」として全国に広めた山口誠太郎さんと息子の山口裕さんは茨城県石岡市の方で、私は石岡一高に勤務していました。茨城県では「花だいこん」の愛称で広がっています。

9年前にはまだできていなかった「南京利濟巷慰安所旧跡陳列館」を訪問しました。日本軍が作った慰安所跡を2015年に記念館として整備したものです。日本軍従軍慰安婦(性奴隷)の事実を声高に語るのではなく、淡々と展示しています。勇気を持って告発した方々の写真が胸に迫ります。喧噪の街中に、静かに建っています。

南京国際交流公園と姉妹都市展覧館を訪問しました。南京市外事弁公室の孫曼さんがコロナ禍でも心血を注いで作られたという公園と姉妹都市展覧館は、南京市と世界各地との交流の歩みがわかりやすく展示・解説されており、国家・国境を越えた人々の交流こそが平和の源であることを語りかける内容でした。このような努力に敬意を表します。

中国はどこへ

「中国は人々に優しさがあるし、自転車・バイク・車・歩く人で分けているんだというのが、一番びっくりしました。しかも日本にはないスローガンみたいなのがあっていいなと思いました」「中国は自由な人が多く、食べ物も豊富で人口も多いため賑やかで、地下鉄が発達していることがわかった。日本は地震が多いから地震が少ないのはいいなと思った」(私の授業後の高校生の感想)

駅や街中に、「社会主義核心価値観(富強・民主・文明・和諧・自由・公正・平等・法治・愛國・敬業・誠信・友善)」のスローガンが掲げられています。日本の高校生もこのスローガンには共感しています。ビザなしで気軽に両国を行き来できるようなることを願っています。